



研 究 の 哲 学

専務取締役 山 崎 晃

むずかしいことを云うつもりはさらさらありません。

人には哲学がなければならぬでしょうし、研究にも当然哲学がなければならぬと思います。

哲学は自然・文化・思想・宗教等、その時代背景のもとに多くの先達によって体形づけられ説かれています。それは『人を、自然を、見つめ、愛する』と言う人間の素朴で崇高な基本に立って、『それをどのように見つめ、愛するのか』と探求する場面で色んな視点に展開され、それぞれの分野で理論づけられ、権威づけられているのだと思います。

研究の哲学も、研究を見つめ、愛すること、それも部分的、刹那的に愛するのではなく、原点に戻って、本来のあるがままのすがた、しくみを如何に大事にして、一つの流れを意図しているか、と言うことになるのでしょうか。

高度に造形された現代社会の中で、より新規でより複雑なものを求めて探索し、研究する人達にあえて言いたいことは、積重ね・組合せることに集中することなく、初心に戻って自然が備えている真理・均衡・潜在力等を素直にそして深刻に見直し、そこにひらめくものを感じたなら、執念を傾けて載きたいと言うことです。そこから新しいものが芽ばえ・生れ・育つのでしょう。

そしてその成果が自己満足や顕示のみに終らず、多くの人の共有するものになり得たとき、そこに研究を愛するものの喜びがあるのでしょうか。

哲学のない人が、いくら器用に立ち廻ったところで、いずれは憂き目を見るでしょうし、研究に哲学のない会社もいずれの日か脱落の道をたどるに違いありません。

若い人達の発想を哲学することが今程大切なときはないと考えます。